



平賀内記卷中



六りの宣旨ゆけ云御食被えそよりをめ  
されうり、フンのひとをきよ是未おもへり  
まき下り右代にてをさして拂り立や引れ  
て、拂りゆう下りて、あく取中の玄閨を  
りて、ゆかせととまききうへ立ましきこと  
すりきも運びやうひんことうこうひ印、但た  
まく新造内裏下りり、田禄ゆゑもね家の  
所大車、ころる友軍いじもて引ちりうそく  
函挽すこりてすぐりひさん、あくらへ友軍  
ゆれうを内裏守護せさせ火災をやうよ

思慮ありへしと悟下さき乍れも清盛なり  
までね歎うるよい逆流乃謀歟いたる爲北  
うちアリ以る時刻とめくらすくまほ  
ハミサテ猿轡を奪せんクナキあらんまし  
りんされ勅立して後人さりあく危蠶う呉國  
伏うつゝそ強竟う項羽城下セリとみよ智  
謀ひりこすとくわなれそりいあん吉略とめく  
らうて金闕をゑりやうやうやさいもいづくま  
けるへしとそうしてかられたり主上内充わ  
きい宣旨の清うたぬア清盛とぞともめらう  
大内へりよへこゆ大内軍を左衆の佑宣盛

三河守教盛淡路守教盛少正義後守教貞子息  
左房の尉史能主る判友盛國子息右房門尉盛後  
主三左衆門尉京安新友左衆門家泰歌波次右衆  
房歌尾左衆道左伊勢者京澤敏太郎貞泰同十  
名貞京政始めとて都合其勢三千多騎六百  
をつりあて京長川ともせよとあのけ原よ  
ひう色子り左衆の佑あけりりや生年廿三歳  
のりくこの大和なれを赤地乃よりきのひいた  
きよ極ふりひ乃遣不してう乃もうかくえのむす  
ところよつたら乃軍のとくあゆくこりくじ  
どりふくらむむに切府乃失をひま嚴乃らむて

黄鶴先よふるよ柳獨櫻、うう見織わうせそのり  
路アリ宣盛をひげつハ年号ハ平治ナリ花落  
ハ平安城ナリ是れを平氏子れも三事ナセ  
せり歌ヒナリモんこと何乃うきうひりあつ  
へき誰アカイ一樊拿強キリシミとモさく  
ムモとテニ子修院三モナツウケテ近侍中は  
門大炊造門たえおりてへうりいてく陽めは豊  
都芳ツヘキナモナリ大内ゆいニカヘルモんを  
もぐ一めこめをもてとけひづきだり照ぬ達  
礼比殿の小ゆきもどこよりうきく大庭小ける  
をれやくひえへだり瓶壺ナリつ下籬つはや雲  
震ゑひ本枝赤葉のこまく乃坪まそ兵ひーと  
なみわたり是れも源氏のさいされはらもも  
サ修みしれうきてナリ大文おりてゆば平家の  
あくもくせ修より走りゆけてゆきこすくめ  
ふニ子修院一室にうきとくとほくうされ  
大内をひきもこてゆひとしとくにばくふ  
アリたどろきうてうりゆまそゆくしとくに  
られける信教に教きゆくと卓の氣のよくよ  
て南階をゆりうれきう膝ぬりりておりよ  
そり人あくへうるよひらんと引よせうせ  
まきせぬとせあううたの男のねううちひき

まきとるハ大きうりのうをつらふえま乃ふ  
また仰もあくをすり切つて遣わなれそつとい  
さんくくにまくと食人セハ人よそる城か  
へだりもみたを天アリシハね下一寝主ハモル  
天のあきもつゝやとみゆらもうりよく家  
タ称詠ふ所とは二人はとよりとくめし作人と  
てキーわけた里わまうりやすだりまんぢも  
のこへまやて伏さぬよとうとまうりうさ  
引れあうて刀をもくやりまくと川まくもえ  
ちうづれてこくよーからうり義ねひてい死  
え日はゑふるよてたそまくまひきくもまと

ふらみてあの伝教とりふ不覺仁い膳しふ  
みよて月光つとうりあて郁芳門へひりされけ  
まく伝教も鼻血をトノヒとつしてゐ  
ウミのせうれは哭のをぬりまげう物北角小  
わよ下で刃もそりきり直參の佑宣威立百名  
號とけたまおりてふ乃あくをき立百名號ゆく  
押よせてよもく里説ひまくハビ門の大將軍も  
信教彌と三つハ傳周欲スリヤハ植矣天官の苗  
裏太寧太武清威り端五左傳門佑宣威生年廿二  
と名のりひり名を伝教西奉ふと及クすう  
れあせけまくひともとておきちりそく大ぬ

乃引落ふらひくわせくる一人もかく殺さむふ  
と云けられを重盛りよ／＼とてお邊の様  
本のりとまで差はけたり參ねまき伏見て源  
太もさきり信教とりよ太膳病人の宿泊つとも  
や被られけりやあ乃歎おひりとせと並ひけ  
まくを取はとてうけらききりほくとゆけ鍾田  
吉原及若鶴佐傍く本源三波毎豊次官ニ浦糸次  
吉原若刑ア長升歎歎御歎思通六孫太狂侯小早  
六然若次官平山武志金子十席足立右馬先上  
總少八官園次吉乃相小八官太史己上十七郎く  
えもみとあそへてソセリシハ大焉多とあけて

ひすの太ねいたれ人うさのききんかう「  
清和天皇の代乃是瘋狂の頭義なり端子遍食魚  
源太翁平とヤミの下り生年十九又ノ一戌亥閏  
大翁乃りくされ大將とて伯父太刀常光と號  
娶城つらゝよりこれうと度々のかせんア  
一友も不覺のふとくとくにとくにとくにとくに  
起まくら小ぶりもへ延ぬりとくさぬ櫻核十  
文字ナリてまくらとくにちよしてもじらやせ小  
目云うけろ太ね軍伐うんてうて極よ、いの體  
ナリてうのをそりみえのぢく莢核もあるア

まゝころしとあけりりよきゝうへて組くみち  
まどりふせよと下をされとたぬ代くませーと  
かせ主家乃ゆくもる三左衛門新菊吉のを  
始むして百磅もくりう中ふうをだすりきく  
魚源太とそーめとして十七磅乃兵とも大ぬ軍  
と同様かけて城下邊れ様本と申はたてくを追  
乃擣石近れ擣と七八度まで追まりてくまん  
くとく様なりきり十七磅ノリけ立らきて  
五百金磅のみそーとや思ひきとおまをもてへ  
さとひく太ぬ左衛門佑をら杖けゐてるの良武  
行うせ路ふふよ既段守つと衆々囊組平ぬ軍の  
二にひじまれかうり行ゆる君つみと向板不  
りめをきくらすよ一をりけてあくアカゼんと  
や里くれきんえの五百金磅とけとくめをき  
意を五百金磅とねくして又大邊の様本まで差  
しせたり又魚源太とくじりふくろきみるゆきのを  
里也大ぬいもの大ぬ主盛そいがとくりも  
うを今友ノリをひてきあすすぎをりきり  
てうんとこれ共いこと下をされきりきり  
りきもうつ十七磅されざりにアリとすくとされ  
を今度も歎ほば扁圓三多御尾不前併着武志と

そしめにて百駕騒り中ふをそぞろよしと  
うせす魚源太らとはこよき不りいもこみ  
純さんもりたぬうちあうり左右乃まをうけさ  
ひもひアツ家平原良乃婿へりりは邊色草の  
婿、也歎ゆほゝまうまうもんよきやまよんと  
りよまくイリさきあへとくち度の猿木のやを  
おひまりて五六度までしきもうだりされま  
盛くもぬるもろくや思りまきん又大えをも  
てへひりてりち魚源太ニ度まで歎と並まう  
弓杖はるてるよりき次第せまう小義ぬまき  
をみて漁鼓銃口残りてうんう、不覚よかせけ

もとと歎をうけりうらわあま、やかまよ  
かせとじほにまうまきまは後退もせてやの  
うりよに取里いすくめや荷ともとて色々  
くらぬ十七度太らや面よつけあててさぶ面  
毎弱り中へおりてえみにわてりうそひさば  
てうございまれるもんかうをえどしてたま  
ととこまよ二象を東金引されいもるすうう  
も歎平少よくうけころもありみあうけたりと  
そがめられまう太ね室感ち三市あつ京安新舊  
左房門家泰主近三猪ち無となり二象伏来へひ  
れられ、魚源太謹函よきともあいせよあく

ノお侍もたるどもそれ色せやとて送  
りたりと、小野川にてまわめきうりちま  
乃江戸に枝木みぐくらぐふ小魚源木  
はのり猪色ふるかはば行乃御すてまひり  
やたうらまほんその方へきとをしてじひ  
さぬかりてとくとふを彌田多勝のモバーと十  
三木取てけの神のりていやうといふ室盛の  
村ひけの神ノもととあて毛ウ色ふぢやうとあ  
ハキをり、里され、か一はすふぢやうとあ  
て龜うつまくとけて木うりノ人きり魚源太尾  
久安ゆる唐皮とひよ纏こさんされを村く木  
ちんふとうてと下知せきえと又よひりて  
毛うぬよとすればりくあくりといこうだりるを  
屏風をノ人モノくよ敷きも枝木のノ人ふ  
もまたうき罕もあらて勢不見も下りきり  
竹ふかまとうき罕もあらて勢不見も下りきり  
と彦わよま盛山川きてても切みもとや里の主  
きんゆとくもとて繩田ノ軍乃辯とちやうと  
けつくれそゆらゆる引ふく波ねくわ  
きほくをくわくしあめられされも三左衛  
のリセよせて中ノトキくハ漢北紀信  
をす祖に食よかとて紫陽乃くここをりし

ほるよ天下をたりさせき主もわりめらき  
時局危すとひよふあらもや京安安ふありよき  
やまさんとりふまくよ麵圓あらはと引そんてお  
おさけつともうりよ源太るおきぬう  
おまも帰行をもせうてす盛ふくまんぞとん  
てゆきりきりよ麵圓おやだすくみ大將おやう  
さんと思安しきれしも大ぬやくまもも  
あふ下政をうさせときくとゆりひち  
三刀あつよおちあふて三刀うへてくひとく  
室感さたのく切くら京安討せていのちいきく  
すふりやんとて既不ア源太とくまんとせ  
ききよと新安た傍門をもあらお泰うひいさう  
むふとてじとおの乃清令どいすてほふへされ  
とて我るを引じけ中アヘテく、源太とむ  
すとくむ政あい室盛よくまんとくまくまと  
えききくわくみりーと思ひされを新安たまつ  
アおらえいきて頃をうくは隙アま盛ハ虎  
ねを乃つきてたりまそう為うれきん二人の  
さあいあうまーうもたすう為うれきん二人の  
ちうちう十二月廿七日比うの刻もうりうと  
ふト一もうきあらとて風をもけとくふき  
たりうり強風うれき乃人福もつづらぬたれ

ものりとじたり源源木尾を見詫ふてゆうと  
は行てぬきやと並ひされをうちとのねりては  
ふくとをぬくかまへときよもうりまれふ三  
河守教盛を郁芳門をキヤセテ山内の大將を  
きんとすのうれしと立つてほどのたぬ小  
清和天皇の代枝胤を頭源の臣義朝を名家で  
源源太ニ一度まで詔をくひりとすそしする  
めやあそびと並るハ中ま大史左右兵衛佐新文  
十良平駕に志彷彌波ア大史至成をうめく  
てこれもくとうけられきり右兵衛佐新文  
延年十三と名あててきニ務村ておと一號よ  
もかふせとよとすくむてけらききり夜  
る駕並ひきつひゆくのくともう百姓のゆく  
さきゆのよりよゆるそおねうけてせせん  
とて真赤ノモくあれられも一人あみわせ  
うちかみてそくひきつれ感あもくさく  
へらきげつうつうりかへせりこさう參ねばく  
ひてせあうへとへと大ま面へれりきり平家  
の氣とけうせてうけ入れハ源氏太内へり  
こりり源氏又れ足をやれりて無づきと早  
家又太家おりてへ引ちりそく平家を赤もくわ

りあらし日下映してゆきやきり源氏ハ  
太旗あこもとみまをすまく向うりきうり  
風小吹みてまきひきすこめふわりと風を諫  
アトモさゆくとてわりえられ源平れ矣とも  
まよ食をす一風流ハまのあだりうとふまとも  
かあらえほまのえりにまんとらくを前  
途とたくよだり源太左衛門佑とばうりも  
う一鐘田小ひりて盡ひきうち那芳の乃りくさ  
ハりくあらんりきや既々乃清そき仕らんきて  
うらうてせ鳥り又ああみそすまれけふ  
寛は鐘田ウトヘ八町次席おほかく剛者入也  
う一里のまきりりるよととくとくすくられと  
も中へめらく、よりれよと云うれと  
き一とせきりまきり小奥足づりめくゆくへ  
まえりりすくたりきう歎のじぬ武えり  
もううか先にちてねうきりを八町のうり進攻  
てくいをとりたまけまくとれよりて八町次  
官こうそひげつまきり又バ者三河守乃安ゆ  
早立乃名るよもろ純をあもせて無うれきうよ  
もありと柳とうれ進川きて軍ひてゐし小くま  
てをすかきんくとゆりひてもうちうれそれ  
盛も甲をうらうとかけくうひあくられけま

ハ五六度ハうけをもしもううけるアモ  
ヨガナケてゑりやとひけハ三河守院アモ起さ  
ととまきぬゑア召モラレキウクモイシロシモ  
をひんぬりてゑくくゆくまでの柄をよりとニ  
尺モフリをきてほんと切て落されければ八町  
次多のけアトシふきてあらひうち京わらんを  
こきとみてわざれ太刀やあさきぢり三河をも  
よまりだり八町次多もよしけたまとう感し  
きつ教盛ハ軍は然レトキミ思あづりも桂  
毛刀ももうるレニ三條を东へも食とくミアノ  
立条城東へたりアマテウスめアモおらうれ  
きつハ中よ侵みそ召くた里きくめいよの按丸  
なれハシキキケふそレトモうりうりヒ太刀代  
按丸どりゆゆつも放刑アマ忠盛池あアリヒル  
寝して、ホリ一けふよ池より太蛇あうまで忠盛  
死ノサムとくはたち枕のう人アリ三だりけふ  
ううりうくはふとゆけて蛇ふわくりされ  
蛇ねうき蛇又あくわまんとほ太刀まくぬけて太  
蛇伏えていけのけアリ立てまり忠盛こきくみ  
落ひて、一按丸もにはけられられ忠盛に腰の毛子  
アリよて教盛是体ね傳志野ふゆゑ小清盛と不

快かりきつらうきこそし伯耆國たりまち  
う化と云く三河守代おとよんせふをきづり  
上伯少は太監也小監也若方衆の尉助隠若若内  
う子敷内至而家達成ノ一めよてされもく  
と歎きり若友内家後ハカナリ太脇病ハおきえ  
とりうち者ヨリけふりらすく大物ハ中づけ  
さてらきてふあくじもせ引をふりるを衬うせ  
てさひものとや思ひせん小屋れうりへかけい  
里ぬ其子家達也又背似モ大剛吉ヨテ安く小  
たくひひ歌のまた計々と引けれうちくらひ  
ソれでうわ主ハヨリいけるまゝりきり

と益会されハ家達りとてゆふりせんとてうり  
一人とてぬ一ノ聲不ミ乃歌をきりかせてあり  
無とひそんてやうりうらう舞てゑきうとくや  
のうりまとくぬぢりきまば公うくかうくくて  
そりいとんとく思へとも我場なれをそろ  
しきてみうとあくを見けくさり松月ふ  
六りくへありけりとみてよくまぬえのうる  
里きく平家ハ勅定アマリセてゆまなりを  
ひ人モ源氏ハもくらうことともあくまき平  
もや因裏をすむすてく通幕く夷うつゆ其  
るうつ軍をつれかれて門に残りふせき

乞れい源良内裏へも入えひしてう、ころり六  
京までう、あられきり歴落御道と段落等房とも  
ぬぐくく乃歎と通函して東三象よりをへるよ  
武者二騎もせ東まち高盛先一騎の武者よ急め  
もせよき、いたそととくへ安慶國住人東象乃五  
名と名ふ不試よひりて対たとく其領をはく先  
もソフ小役若よりへ高基も一騎の武者よ弛  
りうひ内通へだそととをもん讚は國乃住人太本  
戸代ハ君とおのりもりて補充もやくひ乃嘗い  
てたとくもきひおてあまき刀をほへ歴落御道の  
きんぐんよやりうこすてや寄るといひうちへ  
今朝より家へひりうるうりうま領行  
てゆくせんりきもさんとひきりう二象から  
川主をもせあり枝木のうへりゆきつねくひと  
うをひくいくみみきり立地のうめどくひと  
うそりけてひくひううふりうりひといひゆく  
うそりけりつねもうしもひてああうりゆくうん  
うそりて日くかくまとゆうひりまゆりきりうり  
右傳門舞伝教い今ねぬ黙つを放られくねい  
うきの事きりひもよすひまばりとめて  
あらんくそそぞうききく歴落うけあくねそ  
大内もも思ひをしてゆめと力勢のわくア

はるてをひく河原とあうれけふりたりへ  
をすせずして河原をひかりよ落らきまきり金五  
匁あまき死みて右邊の邊あひとおちさせ行へ逃  
げあひせんとやせば參ねたゞたけあま術の  
不覺人あきそ中てりくさうせきわうとて河  
原がとどりうせられきり六波羅かは立象  
乃橘とこ下ちありいとくよひて浦原よ源氏  
すすむうちおよせととき代吐せんくりくれも  
清盛うきのうゑよたろきぬ具体せらきけふ  
ち軍をとてさうまあよ美濃へいはとを將軍と  
うまゆ小いとやせえ膳一てやくからんとまも  
れえれを主とこらせ多へてきひ方へひ  
くちく君代えろりうあひせんくれうれ  
ううるさうまあ小姓すううう一と蓋つても清盛  
ゆ小と主へせをくして刀くられうらすうと  
て者ともとて五百枚號もとけひりはる兵庫  
兵源太極の外りてあまりひり色たふを教  
政うそしに小くひゆうまひつみされういう  
まけハ平家よとせんと時宣城モカリとみ不  
ゆううりきげちうしてもとんとて五十枚號小  
て地りうの後邊ハ兵庫頭う源氏せらだもハ一

門なれハ内裏へ集らし平家歟と名主上にリ  
ませハ六りくへ衆三千と軍乃勝負致うかふ  
と見るハソシトヨモ士をゆきあら爲めゆ  
そらとくとア源良のあくひをいきす  
よきやさんくせうふをみせんこと三十文字よ  
うけ破て返うてくせあうくふうもりさ  
めあ凌轡盡日あらハ百強みもむひひ子強ふも  
あもんとくとくありトロドモ源太トモりさ  
いよふ夷うれまてるのア残うてく称たれさ  
くじ良者一揆もあくりまくり新政う扁等小下總  
國住人下河邊殿三郎乃若クムヒナリわ模因  
住人山内湊菊流は後退りくひ乃賛成以之きて  
あうちたらんトキまほ义刑ア憲めまきをみて  
冬一筋よされりとよもろとくいこめられてち  
杖はるてのりき代らんトキ琴を刀を拂ひて流  
はえまくと村うねけりう歎トクハシムする  
とトキセシトまくられも歎若物あ太刀とぬりても  
せ高だり後退五色んとくとくとて、まきさくと  
りくハ志感流曹司乃所よテえの兵を歎よ頬  
がとうはく、歌うる流かごもとくありとい  
へも後退よシとヨリてりうき大ねみくたり  
ませハ乞まで乃所ふもせゑトコトコあせね

アカムラリル内ニミケテシモカラセテ  
そのうみあく為やとく所残せんとてアトヒ  
シヒキとあもセムヒのをの魯テアシセキムラ  
矢とふ弓のアシヒリカアリミタリキアヒトセ  
シヒマレハた摸画リテソ雍列於ルカ河原ビ  
ルヒトスカリアトケツ又刑部議見をみて一食  
トウロクテ軍トモウモ醜口をモ小アゼル  
タム也後繰ラセテ食りきてゆクゼンヒル瓦  
ゼンヒテ無クレハ曹司アム無刑アラナス  
ムモモト並々ソ渋ガヒツモものソセフサクテ  
セイヒタレヒタリヨクナミトドクモアリ  
ノヘヒテモ教政トアムウチニ義ねヌ欲せん  
モアモハ思テアリトモ魚源太アリケ立  
ウれてこれヒシホシアミヒト六アリヘニテモ  
モリタリ深小魚源太ヨリけ乃り可及リテモ  
ス一人ヨリヤ平家ヨリモキウセリモキアリ  
同士軍小あたリ兵士モキウセリモキアリ漢  
祖ヒ楚項羽ヒ國ヒアリヨリ年ハケ年我破  
夷事一七十二度無度項羽ウロヨリアモリ也

とも政をみどりもとまきゆへり、民怨せすす  
祖ハ發つてよよえりとりくよも極民は濟あら  
ク在り人是かく、寔ノ王陵とリ、ノ者あり  
城とあらう、兵とあら、先あら、あらの従属を  
まつりゆへよせ、あもくとせば、漢ふもてきせば  
して、あひそくへそりぬね、ひ放ア、頃羽志  
まりふめんといへせ、虞氏ハ、引込をかきりみて  
義せざら、ひと則兵残ばらそ、てあきをせむ  
ふ小城、よして、まは、よそ、整正大きよりうて  
の法方ノ弊とそこ、よそ、整正大きよりうて  
もくらじとをめくらじて、まかをくらじて、措り  
たれてよ引うりて、まをくらじんよ、王陵ハ、ま乃  
一乃あられ、こくへりて、らびのく、わくく、ま  
してかく、くは、を、そん、を、く、其弟と生  
捕て首級を、く、被せ、き、と母兄と、生  
きひて、諱不、王陵を、無双の孝みを、きを  
し、精のとて、よみをし、めい、ひみらに、整小  
く、うしと、思ひ、き、志あらん、あらるひ、うか  
王よ、怨すへし、汝も、み、祖の、臣と、うりあへて  
もて、や、よ、悔ふく事、うれ、うそ、よ、やく、元  
を、つ、う、を、も、と、て、則、劍ア、うて、むあ、く、き、り

一乃あられ、こくへりて、らびのく、わくく、ま  
してかく、くは、を、そん、を、く、其弟と生  
捕て首級を、く、被せ、き、と母兄と、生  
きひて、諱不、王陵を、無双の孝みを、きを  
し、精のとて、よみをし、めい、ひみらに、整小  
く、うしと、思ひ、き、志あらん、あらるひ、うか  
王よ、怨すへし、汝も、み、祖の、臣と、うりあへて  
もて、や、よ、悔ふく事、うれ、うそ、よ、やく、元  
を、つ、う、を、も、と、て、則、劍ア、うて、むあ、く、き、り

よきめまくりよりて至陵あみめちに頃羽をう  
ミムリミクゆくよ忽りすむむれ良とよは今故  
くわくわくもとしよまてせひとくづり是もん  
くとあることのむ款なれも祖をだ小もつらた  
ゆ一な子あひ傍款ありとゆももとめぬら  
ら張せしむる一微ふた事の前ハ小事なり  
まきは大孝ハ小謹誠かゆりミ役といつて大座  
きの力よきトテキトて令をうしうよも見  
をだすけて身をやりかねみよゆきつむのり  
うつて心源をも義をもてねあからまくうく教  
政も名将みまほえりへくすてさもんく教卒日  
く度暗小庭せらむくふうこようちまちよく  
ませあいのかあくひ伏せんとおりふりゆく  
人乃不氣とて身のわくとく行へ里たとひ勇  
力ありともん和せそいはゆアリウツレシとえ  
一心書めこととくいもく天比うきい地の  
利よあうと地ノ利さんハ乃ねアリトツスドリ  
まく太波屋へとせらうく小一人あ子ハ共レモ  
高弟イリすじてたくつひきり金子十萬豪忠  
ハ保元乃合我すもろ朝乃ちんアリケリりも  
るニ即兄オミとんてうちハ名渉曹司の矢をも

既にうきてなばりけきく今度も歴見け  
てす。かひたり矢うちもみよりく。いゆくも  
ひまゆり太刀をもうら切りしませぬき太刀を  
ひさけてわそれうちふみ今一合殺せんと思ひ  
てうけまさらふ。同國乃住人足立なる先達え  
もせあれもあまはらむ作へ足立などだちわてい  
傍もきうへあ、は思ふうううりはもんとつけ  
れどお里ふしもだそへあうりト。ども後邊  
うあふうをうきよとこき成うたせげり扇  
ホの本刀残じて全みゆそあうんきう象ね大き  
アうう、うんてスケリ入る款あまうてきり  
足立うち良等や參るハ日はよりぬ前通り行  
まうきそのと不角めせそしとつゝこれ中  
までうち死ねぐん小姓をもうちらめひれぐる家  
奴の内使ととをなせりともあまきかとア犯  
うきうれまでハ先うりヤアアアアアアアアア  
後をきうじと上等をすきうきまくをえどよ  
里とんておりうんらううりりりあむ、ともしり  
きうりあうきとも全みゆ不運れりこしきいこ  
ア内通うたちを内ほりうりりくことふうも  
主のため討死をふ侍寮アアアアアアアアア  
そのやぬうん漢ね乃李れも徐君よ効をこもき

そをやくまへとあううけ流りきありくまて  
とりよふ不不ノ詠云猪來て是立とうさんとうり  
ふをすりきえまつまくまくふそくむつう氏者と  
よひりて兵とりも矢あやまくも内卑よえ  
るふをまさうさぬよめちくれき乃うりニ猪を  
る城おしみてぬすりきりをえやうてモー里よ  
くもいふ太刀を引切てをううりゆう  
まん中くもたらうすふううてをあふわくを  
おつきてしとまくうけられ源太監ひきう  
きふ六りへあて門内中へりうさううそくち  
きうれすくめや去くもとて究竟の兵五十分  
勝志あらをかくわけてうけいれを平家のよ  
らひあせきうじもとれとそ入アキラ殿平先  
手さをとけぬとうろうんてれめさきげじてう  
け入猪人里傳感ハ小の巻乃ぬれ戸アリソ  
ミト知一て居猪ひきうめをあく乃とひアリ  
てきひりそアヌ乃ゆうじくよわく里うれい  
傳感並ひきうふせをつも者よもりあくねう  
きけれとしとあきまく詠ハらうほくうめりそ  
くそくをかせんこそ、うんのりとたれよくう  
京御ノノ内禮モくろぬりのた刀をもと黒カラ  
の矢員ぬ里翁とアハラカで黒きるよもろく

をうせてのり行つてうへよりまことに御とみ  
しむるふいてうきけつゝ純あんうり太も  
りけて高まひたぬ軍の征人ううどと太寧大  
武清盛うり見兼せんとてうけかられきよほ清  
曹因是代きく清ひ源を家平寛よりえたり  
やゆよとさけひてうく平家のさゆうひあまと  
みて義母守义子主る判友義就は源兼尾波も  
あめうて究竟のつもを志がふもせふさくて  
我なり源平モリりれみときそめくと義母と  
もこあふだり源子ウ紹セノ不子房う清和たる  
ひ乃トまちみちあれハ平家の太せし陽不  
ひりひでかこまんとされともひよめられ可陰小  
そちてうさんとそれともうこまひす安善化去  
て源平二方をよくなりうて西をよひに東をよ  
里のトも源氏もとねよりのたゞ是武士  
りきをもばうす夷うつうふ平家をよひもとへ  
ノ人ノ城ノかくてもやくめつけか  
我ハタれも源氏はるアリおまけてつうり外へ  
ひきうちうきやうて河をもせよこし河原と  
あをうひりそきげの義朝もと見えびひて源平ク  
河うちあへ引ほうハ家乃志とねぐゆらそひよ  
きす小をす期すとき討ひせんとそりけられけ

主序 錦用するをとんてねりやうつまつて 立  
ヤキムカシヒテヨリ源平ち矣哉れといつまも  
勝負トヤセセシトヨリ源家とは皆人だけ  
きむとヤシウナヘハ梅檀ノ林小谷あるく嵐山  
山中は立石ことく乞義玉ゆづりて 源良  
不居ふら共までモラ矢取てハクと得たり  
きよ今御よりのせん小あうる之人にうきそ  
ぬ具小もきまね不く矣た御代き物私きてア  
ある活勢色本とお宿をミフトトキアリ以歛詔イイ思  
あふこもフヒクノミトモスくて雜人ハ  
まよわくりと汝矣小討うれてうこまん度ト  
タケキの入乃かうひなれりう乃トイもん  
や大約ハキモ殿代詔さんノる歸ゆきしこと  
をやもくらくつもへもぬちもせめひ山林よ  
方波うもしてこはぬもくりとのこゝをきて  
きりもの波をももさせ終りんこそもくりこ  
とのひうつとももくろきれ呂とくくまでうこ  
きさせゆひすハ詔をりよく利をえ法國ハ源  
家を皆らうをたゞりそうちまうスハ詔よ  
奮しにえんたゞひれりくとして法國害  
はし、ふかくからずあせで東國ハ清オバ太  
のえあうやうにこそ活もすひはんぞれだ

巴ふ孔ぬしけふ仲達をもあくへとことアた  
歎アノ原もくと歎アノアラキ清もんまし  
ありことアノ志そんの法を廢アラルモノ曹司も  
さうくめて法所存あてうおアリアラムスルモ也爲  
させ猪ヘトヤセナはあつは人引ハ逸坂山不破比  
園あ浦アノキモひうは湊廢アリモヤモクヘ  
きゆくをとく方を免すへき不破乃クミヌキは  
中ハ氣は乃モラアウセアリめくして討死せん  
と金持人を政府室でヤヤアムカレミとも弊不  
きひりの物アム免セ一途ニ至りハちくシ  
テヤモクモアリヒトと並代のこほいヒテ後う  
してアリヒトリハリアムリハアモテ渉服めモ  
まん半ヘ乃義アリキ越王ニ令鶴ヨウムシ  
漢初ハ景陽ヒカラアムシムモアリヒトとアリ  
てかきをとけあふわシモヤ另ヒマツアリヒトとアリ  
トウロハスをあう多博ヒハシヒヘアリヒ  
のひさセ猪ヘモテ法る乃ロトナ乃オヘキアリ  
けられハ鍾國ウドリツキアセモスルカタク河  
原波のアリアノアラルモスルカタク河  
村アサニ三糸河原モテ鍾國告傍ナキルハ頭筋モ  
村アサニ三糸河原モテ鍾國告傍ナキルハ頭筋モ

とせきや仕つきとりひきれを平賀の定席敷宣  
引くしとんくくうううちれきれハ殿ねか  
つり忍びてあもれ源氏ハ難ぐまでもむろ  
くさり者ハ見死ものうみあくつそもの平賀  
うこすみ殿宣うだすきとまつも佑く本源三須  
殿刑ア升津四良をくじめうてわきもくと  
高弟アリモセよさうてらせききくう佑く本源  
三秀美ハ歌ニ勝切くあくうもも員タレ  
も近に圓城寺にてゆちアリ須藤刑部後通  
も六條河原りそ続口どともアリうれせんと  
すみととくめ名ひくとも亥まで歌ニ勝  
詞うてほわりうきてうり升津四良宣美ハ  
廿四ぐううう矢をりて今ねたうにひよ歌十  
八殊い抑とト今乃合戦ア能歌四勝いあら  
したれもあひよよよつうのくうも役お  
物小なりてゆうまいきくわゆじまゆておき  
枝ア山浦山浦ヒヨ軍樂ハ升津名うゆきよ  
ひ強ひトハ鍾函をめいて海アうき姫  
といふと蓋つももくうのゆ小中をきき  
せてはとやせけりくこよまけておけうときく

りうちよりの事うり田からん中へもろとてか  
へまや益々と難とわけて六衆帰川の育ふア  
ツセ東く乃タれもりくこよきて人ひどりも  
るによね仏事の方よんをとあけまわひてうり  
よ姫君仏前小經うり後くれリ事うり改教を  
ほりんしてうも軍いいゆよとひひ法へ  
頭取をおまけうせ終ひて東國乃めとへおもう  
ひくひめうみれ法と云のこづみ事うり  
チセ終ひはとやせもうてき我おもとと教ふと  
トおさきゆき事うりと刀ん事うりうろうけれわざれた  
きをいやきを女乃男福かうつりきら奉  
モ印若傷假承事うり下ニかなれ事うりおとこされ  
ハ軍引事うりあく清修事うり行ふトヨももく十四  
不事うりみきともぬれ赤うてのうをりき我の  
うちをうのこあく歎火のかちほをけうさん  
こと事うりうみ事うりうれもとそもき跡へいつて  
て頭取比見奉よつれもとそもき跡へいつて  
あもひれりとひせばうておうき事うり  
つみとて内縁とまきおきの仏前不事うりひ事うり  
をあもせ念仏事うりせぬても改教つとありあら  
トまうんとまれども法華堂の中より事うり

よりあり——素戔もととまてゆふしうてま  
らせたれひいづてり裏うみみゆるをきなま  
よくれて刀乃三面もあわえモーてるにぬだり  
されも駒えどもやううけくみくくと  
すくめ筋へはううすく三刀すて清くいは  
ちりぬ元獻とほゆくねさみて馳う色里終身  
の見事不いきだりされたく一因清人にて  
なまこにすりひせひはひきるの東山んがさりよ  
ちりぬ角弓う僧乃所へうめぬれくひとけうりとて  
うふりひてうひ筋へとそろ彦うの孝う玄りと  
よ卒家の軍兵もせゐて伝教殿の高木代え  
うて謀叛のまればあふをくやばう  
えやきりうのトも其事えきしもくあう  
つけまどい山壁よおをそかうけつかう  
ねちゆへんこさううねうにハムシ様とあく  
乃くあり死かゆりみて歎ハ今やううにくらん  
ゆそけやううけとおをもとくりは穀山みは伝  
教殿ぬううけとてたりくらへたほうとて  
うけ主戸の塔波峰あまきとまくていさや唐人打  
うち發ねいゆきく及川歎とてうそくもうちうけ  
へき、方乃纏四ツヤ状小さくてあまきまであらて山

往々よりありひる紀元をせんもあらう  
ロお一ノれと並んで御苑ある處「もういあくと  
も実感は浅しもとせほもんとするよりおり  
軍をぬりてありひしきみこれりえとなりて  
よりうけぬつきてひまうい太陽の鐘た  
る歎歎以下をもとの人へ皆大内六つゝ見て  
討定志候ひわきと法國のうり武者ともうち  
をもあらひさい——を刀んためかが風よおら  
う風ひうりうりともうて罷にくりよゆりあ  
う風もん奥足をゆくまんためあらは物具ど  
もあらひちんとをて治ちれやまきひきふ  
もあらひきりて名あらきり景良まへうてな  
くせん奥足をだ小ぬきすてふきよ——と  
食詰あげれぞ矣盛々、拵て衆候を大せい木ハ  
しまふれくハ小勢なり草摺然切てもなば  
及くと一兩アリすくめふわく大底むちきをと  
りをもおりてアリすくめふわく大底むちきをと  
アリと一兩アリすくめふわく大底むちきをと  
軍とクをとあけたりきり候もじとりゆき  
されをあらそ教へていをもやうくろいもむけ  
ふふフ)此ニ説乃共む物と接てよとの」

あろをひこけうとひけ入れちらしてとを  
まうちへ大戦ようちうに長刀をとりあせり  
あすにまたて追跡されいま盛ね不思ひか  
てたの中すく取てほどの敵もてまうす  
駿ぬの昂おほき彦田住人長井敏翁お高ま盛  
りとくめんと思ちくまれや兵柄の程せせん  
とてれて西せは大戦の中すくらぬいすあーを  
かくみへとやおりひきんみ引てえりを  
里きう駿ぬ八郎の松原城をられきくよじより  
反くとよふゑもんけまげゆゑやくしとら筋へ  
ハカラクふえ殿へのひぬらんとおひえほら伝  
教ゆ進むて大軍アリまけて東國へたちん時  
き信教をもじきそとくそとくやくしりん  
うもうりカヤと並つも義ねあまり乃小とぎア  
腋とすへひく日か一乃不登人つう大軍アリ  
おりひうちて一軍が小さじして我方もやうひ  
人をそしるふたりとたれてたれてたれ  
すい宣まふだりみてわきうる敵をりて信  
教ひらきの急務をあたかめようとききり信教  
は返まつやと志清も鐵アリ腰をとふ神モテ  
あきよみむらめをくしまきてくそせうれ乳  
母子死ア大丈助をあきをみて何者なれぞ簪

とほつていやそ和人せうの剛あらはすと軍ふ  
もかこもしてまけてお國へうふそく云々され  
も歎かの男うえきのまいをせとうて接ふと  
宣ひきまほに彌田若傍うん衆只今うふことのい  
ゆき歎やほきはうんひさせびへとて妙處  
ノ又横川流源上下四九百人伝於參ねれれつ  
ふうりおとめんとて龍巣越スノ遂本ひまきい  
指ゆひてまちうけだり三十餘磅の兵各もよき  
龜おりノモヨシカ並木とげぬもせず乃  
あせくこが教どるノトウ山城ハ中よりト  
傳め起さげめさんノト村子うきれも陰奥  
六扇扇障りうひの骨をいられくるよりさう  
風ノトおちうれてきり中え大丈巻約長もらひ  
比股ともううか付付られて絶をよそひじが  
ひうちれを教ね大丈ハ矢アーウリテウツ  
ユ縫はまばせようめすもと立たぬそもの矢  
ひうすくてすてこもひを近陰奥六扇扇ももい  
ハキをもせぬひはつきとてさうぬ狩りてゐと  
そくやめうれきう六扇扇とき給へもくひ伏  
とくせて義朝宣ひげついら矢とく弓のあくい  
りくさよまけてたほうハ景ノレとうつそれ  
を傍流乃方うてたすくふまとあうあくいめ

皆包むとめんと物具もんとふくらもんを寄  
栓されふくひ金はりと役代のためトトトト  
人とのこころうてや者うとと下示せきえ  
ハ三十枚弱うつみとあへるよりはけ  
還まくせぬほめ妻はけまりにけられなれど  
山伐たり木不三十数人うそきよされとのこ  
ふた衆大略もあひてをふくらへう色ふと  
てば傍人計とくりんとりふ事ハたれりひ  
かせらる事トうとてのきよめまこと福しきち  
りと木同士軍を志りとくス拠尔くそ距小  
きく敵アホお家の首うて傍人計とく勢れ興  
うとひとうしりとて終乃おら我肩よウナミ  
うれせ乍くの人をうとせまく同士軍志り  
さあくの流流をうと終乃おら我肩よウナミ  
ゆ奪うり走藝のたあふも瑠璃かりよ青は真面  
玉を肩き神ぬふともえきをりうそめう  
えししハ欲をも思あ一けきと瑠璃花はふりと  
アミモおりぬてるをやどめられまくか義朝  
役者多情志基とてて海ノ一旅けをき一娘  
きりうよと並び私のみうくくやうく  
うて彼へを別ハ送ヒトヒヤニヤキリうてハ  
うろやれうも海見より故へかゆりのなり

娘とううて、あまかもあ、歌ねり。歴世著述と  
かくをせよ、意をもまついて、まとも清修社  
里にむらぐをあくせ、後もんはを括とみとけ  
あくやくじくじく、人里乃やりひもんもれとや  
どけ存をぶむ孙うりうくと、直へもちう  
及よき教へかへりひめ君よ川きをりあく」  
こりかくあきよせて源氏乃夜よにきり  
しりも一系ニ佐中将能保つ乃か、北あ不トカ  
まりきり下り高墓も纏金あゆの夜財ト、世小か  
きうきうきうしも宿ノ伝教にさすてら  
きてハ歌ハね原うりれと、西ふきをりうれます  
ハゆるも六十弱もうりありきらうばゑと人よ  
須をえこきて、西事トをだふちとまを孫ハゆる  
主ゆひうみひうトゆくもふをさしとおちせ  
丈もうちりくくナキち幼トゆい乳母子かア大  
刀く持人ハあり若川まで、もうりいきむろし  
于のひゆうひて、アウシセタレともとねのうき  
れふえト、おどろきくほ、胸ゆきうりて、口を  
がふもうくくのと入法孙ハキテ、一日  
もめきくううりするト、口このせくいにへ  
うりせぬもんとぞひまきも仁和もへと、

游ぶる遊參望へうりてうそそく山波原乃充あ  
うう波葬へてう色ふ者ともよろゆきあひまう  
波原象山城主てびや中不アあのひてすずす  
冬彦人のかみりまふりてそあらんと討とくめ  
てぬ具をけと乃アあらうれ波ア大丈とくめ  
は尾をたりうり彦人を逐て長坂をむづみて  
はうてきをもやおちばひてはるうへりぬりう  
アうそくさひうし造力乃勢小遣をくみて  
はうかりとうとへきまほもあうるまとやお  
もひきんもくとへきまほもあうるまとやお  
くきふ引と乃んとやめりひきん織志りくい  
壁体もくくてとてねぬゆりわけて道行けい伝  
教が紀アうそききくわゆとおり物具ねきもとく鑑  
本ほくらとくるよとおり物具ねきもとく鑑  
本ほくらとくたすけ落へとてと合られなれ  
ハ水ア大丈ももれときりうれより大白衣よ  
てもふく仁和ちへまちのけめくみ乃名あ  
まれも内にすりうあくとすらんとてくひと力  
奮て衆へろよヤソれうれだりしゆく  
波伏見源中幼少師仲ツセ集里藏波中精威親も  
もくとまきり上宣りとまり不便ア不原一也

さあく人ゝされをきこりアカウキラキ  
てまわ主上へ信れとはなすけをせ候人とほ書  
てあくさくせ候ひトロツをあへて此西事ノもみ  
ナリきまくは宣稱て愚老をそのみでありハフホ  
トモみれもあけてたすけをうせ候へとゆさせ  
行ふ伎もいよだフ人らモアノ三河守教盛  
侯路守教盛あたぬリト三百餘騎仁和小を  
ナセ伝教をうりうて上宣を教え系りさて衆里  
あつまりうる謀叛八家六十餘人めれくわを  
られきり越後中野成親等きい鴻毛りの重翁め  
アノ不禮候ゆて六所廢しる者八人ア引  
すくらむてれりきり正そふ死罪よとくまう  
だり一と至盛今度のとくこうの考より人  
てあつたりがひきうきりば中の院乃法氣色よ  
き人まで院井の奉一門とせうききうきま盛  
も仕内ひひととア芳んせうれきうゆ人あり  
とくんよまた人へすまかあらへま事 ゆや候  
教マシヒ左房門佑して謀叛八あめいたう子  
らう一事の附着みも及まもとて天魔のすく  
めよりもう欲うきげつ我身八宣稱をもあらず  
今度もすりりアノもアたすけをせ候へとた  
リナウヤそれされをま盛のきやど八不覺人助

けとつせらひたりとおゆりと乃ともひへまと  
やまきもちとも清盛と友の猿轡の平人より上  
皇乃ドサセ持へ世君もまくに爲づれりり  
てわがふをゆるをもまくやえ犯す立まう  
ぬとまくまきと立つも左東門佐元立人そ  
らうるなりてたくれたりやうて六條河原  
よしてすすアノ當波のうへよりすゝまう  
おりひもまうす裏書盛いさむくり乃慈懸酒と  
まくまくほりアキトウ信教とは口なすけ後  
されやんとて木まみふしぬかげまくりへ  
こゝれ路へ毛松浦太廟宣後切をすありトク  
うちのあてともかげえ稱えをまへてうき頃小  
そしてまくらくらうりしゆりさぬ也  
しり院のまうり人まで法人に通達をうりま  
わう十日うち内裏よねてまくにひうこと  
を即ちひしもと西友猪蛇の毒をまくまく民  
虎狼の害をうりまくはけふひを抜き乞食ば人  
ふもなれたりたまう見れり法人やあるう  
彼左助を右大史やだふ恩をうけて越山へふ  
死、絶えうと白居易ノリさ志もことうりうみ  
とうめふえししあくよよまの七十もつりう  
入るの抒ひひこにまア文書ゆくろひり

うけうろくひゆうたまに麻杖持き市乃と  
くうちかこくらんとうきりくゆきされ  
ハ右邊内壁のうちありの下人主の瓦礫残れを  
りんとそらよやと見る所ノリともあくてじく  
るともととよらえとのまこととくらべ杖より  
て二わ三わうちきまく見因の法人ゆはりふと  
りふび入るいもくねの所は無理ア  
きのきア押波アれぬがまの不送をうす  
ひきう引波始て飢きりくにうを見せほろもを  
のきう本邦はあきやうの海事のけりよ  
よてひよどく小くいとまられ入る自前ア  
ちりをさすそされいきくゆう瓦礫とあ  
ク杖を取てすもり、ギー歎率はももとには  
まし、あくふらあ魂魄りゆうひだりめよ  
ひともせきけた鉢の後端子方の佐多をも  
うりゆくませ、ほえおきんさんよりれて  
やが安堵してそのきう草のうけみて忍ん  
う思へひう波ふくきうとてかゆりまうんや  
よ骨を礼せ天人ハ平生の善とくろじひん  
足もとうらしし勇鬼を前世の惡と  
かうひよやうの幸おやゆべきは老者  
を丹波國の左廬監物所アとリふ者なり無念

より少きんしきもうう事なれどもあまうり  
うらゆうまひよとてふくまぬとのそをうりげ  
ふ切き人をされもんに伝教の義教のさあだ  
つひらうくうわまれうる中みもおけり  
すい軍ノ日るゝをねちてまえのえ見を川き  
ま、一あく八歳にて義教ようこき、鞍馬左  
乃やう崎アリうらみもあり、う忍くか、  
黒キとさざらけふとたま方大臣伊藤公モ  
経へて一日の猿樂アリ、鼻残りくとり、世俗の  
ことじそあつよ伝教ハ一日乃軍アリ、もみ残  
かきうりと盡ひ、つこみす人奥みぐ入る  
伏見源中助を仰仲ハ勸業をうり、極りへきよ  
てしと、僧人信教の内侍をうて、東園へえむ  
小路赤門院より、一をきあくせん、ハね  
歎小くもせうか支禮分のアリ、以伝教時、伏見  
へ來り、も釐貌、わうきてあくめうるね  
そりよて、いき叛逆れくこそ、よおひてふう  
て、ゑせすよく、穿石ひしめうる、と聞  
中、もまた河内守李寔其子、吉宗の封、李守そ  
り、かつて河内守、又子ともアリ、うち、山うつ  
うて叙佐除因をこもれて、大越清盛を、山三佐

よりよし 端子左衛門 佐々木綱守不<sub>ノ</sub>任し  
以男大史判友基威を大和守三男家威を至いた  
よりは清盛倉本三河守れ盛若尾張守不<sub>ノ</sub>任し  
伊藤氏志を宗源ハ併勢守<sub>ノ</sub>補毛上つゝ毛山院太  
助之忠雅の歿事<sub>ノ</sub>ハ參人ぬかとうすあらし  
伝教の舍先矣ア擅大浦墓翁民教擅り浦墓翁舍  
才夫もりのかね伝後不恩新伯邊伝就擣磨守翁  
翁中主大史室翁長右若傳教の彷徨<sub>ノ</sub>郡大丈  
室成但<sub>ノ</sub>守毛房通田兵房政翁以下亡十三人ハ  
友誠毛くめらふば内あんやりてたう子いこ  
ふきく民ア擅<sub>ノ</sub>浦墓翁<sub>ノ</sub>陸奥國<sub>ノ</sub>尾張のゆゑ  
のよしハ誠故聞へうぐすまききくその下り  
或ちうじらうじ者候日弓もね下うりきり弓有  
まそ<sub>ノ</sub>る恩イイ<sub>ノ</sub>者候日弓もね下うりきり弓有  
けふハ隸戮<sub>ノ</sub>トテアリて終業一門<sub>ノ</sub>及ひ<sub>ノ</sub>トモ  
こひねス<sub>ノ</sub>行<sub>ノ</sub>てたの<sub>ノ</sub>ひ清志光の崩<sub>ノ</sub>  
ひき<sub>ノ</sub>もあと<sub>ノ</sub>アリて<sub>ノ</sub>ひ清志光の崩<sub>ノ</sub>カモ  
かくれあ<sub>ノ</sub>のゑ<sub>ノ</sub>いね<sub>ノ</sub>お<sub>ノ</sub>に<sub>ノ</sub>夏乃苗ハお<sub>ノ</sub>りての<sub>ノ</sub>か  
まじめ<sub>ノ</sub>を<sub>ノ</sub>豈博安のうせ小ち<sub>ノ</sub>よ盛裏  
乃<sub>ノ</sub>と<sub>ノ</sub>り眼<sub>ノ</sub>ありあやうい乃中ふ誰

久くはるんとのふるまきこそも端川天皇御承  
二年は對する守源家親譲代せられしよりこれ  
かと近傍院の法世久安ニ年アリてふまと  
モ小三十多年天下あらゆりて民庶竟  
廢棄乃仁惠よからず滿内なニ治まで國延長天  
爵の連政をうのトツミ又保えアリ合我ムテ  
信中アリメテミシキトシトアキサキ事  
トカリヒアハリケルトノ厚とぞトウラシ  
ムヌスビムドキアキトノ人おやくカラヒトロモ  
世院アリスル小うりて國カラフヘキ時局少々  
あうらんとああアリ人をかけきあく里にサ  
九月ム跡食後あては程大内ア函院多含ム富  
し積繕修あきりきよめられすトテ還幸み  
らじ幸一志めつへううううう後立入りミ安  
ア左る駿河ねハ未みれ象院雜社奉盤アリ  
小三人アリ兄モ今あとて七にアリカリ中ハシ  
アヒテ五日未ち牛あとて今年しまれだりアリ  
トモあれアリニトスロクハトモおそれけ  
キモ金玉丸を石より落して合歛アトウラム  
てりつちともあくやちゆげどもあくあいわく  
をう色里みて乃さ紀さるよをもやえをいは  
アリアリトモうやとモコトアリタヒム

へきうりを引くへふるまゝ山みもすとくし  
もうおとつをまちほんといたるときえ  
をうきもきくもあへすむきらほきてやう  
め里たさよきんこゑゑくす又へいつとた  
ゆ一あらう頭ないとらひ持ふゆありてとき  
をうくくくそてもいはりへとうきくげうと  
ぞひきまほ禪代の後家んをれおもくわ  
まのひとへとそせひ一ふも清ゆくも  
ゑ掛不そつみくそんり假人へいとぬすてこそ  
かアソタウカ助入内力子とと傳信十二人派  
形せられきりまの活ためあくて不承然ぶせ  
そりーーたばれ又をなれを縦伝教養ねふゆす  
ききて配ふ小ありとも赦免みてめじとくを  
きふゑさス) 確句流覆よ如也とあくとつの衆  
何事ーうん得うーーとり色もこれ人へりとの  
しーー背へえりまち伝教圓心の事) 天祐  
ゆや達せんすらんと恐怖ーしてお太助を詫ふ  
別あ怪方々すくめゆり天子の擾亂すまき  
まそ君も奸角へりやまときりとうろあう  
人を「もぐら庵名立にぬねみれそりくわを  
きくためー處を詫家怪力乃謀計ハアもれ  
きくふやほるノ) 左邊のうきへふ志摩まり

信乃乃子せ内か乃富人ノイもく達和達乃考乃  
不ううはまくノミのあよをもむく日  
まてもあくノシトよりねくあとよ見訪  
至化くまよる所とおれをもくも浦よおと  
じそんハハ主比塩湯をわくれてゆき東閑へく  
トロマハ子墨比山川城をうてううろのうう  
うわもれう中よも樓慶中ぬ咸寧をおひへう  
母とおきうきすう代わりよてく遠をのうう  
トキもひ紀多くせうてのめし姫波キタキヨ  
西ノリヤテらひてゆきも身り経もさきく  
う寒岡ロカ多よるとくやく

うちうへ比きのを蒙ア)約ともてねゆう  
さととか身り見るノミケくてをに聞をも色ゆ  
けんソふうくのあひこニもしやまニや  
ち山たノ一山淡石乃レとうりヨコモニヤハ  
中山乃山をもみて行ハ教よてゐア)のミ  
ミノ一地おとされア)あらぬをくさめて  
うひたひをうりよウメ足ノ山也とある  
わまくいづく限りともあざりじノ豊やアリ  
か孫ノ井もだうびれてゆけハ下豊岡府よりま  
てヨリすむをううむハハ鴻とてミ身り経へ  
きすみりんがそくの不至ておりア)感歎也

思ふれり。ひよくくうそやまき  
思つたも。ありきう物をあもじのやむの  
八瀬よたえぬ恵りひきあくとけ夏よだ小忍ん  
は思もこまうりともほいすこうとねむる  
めうてれ草の庵たとるんかこもさう小忍  
うりかせり方る歌ハ壁田乃浦へ打あて御隠  
れ顔を見ゆハ惱ゑに渋子の名あかひ人を  
うりとたり。うりよあくればてひよく  
力うくとせやゆきとてよくく念仏ドロム  
うひて水浦へる比と股のと教までうり入は  
くとゆくたさめうれうりやうて舟と舟  
ゆくとゆくとせられされをゆりよ。彼風  
ト物ぬ波うてうみをうりよ。うれより引退  
よいかうふま。これらをうへくをわへ。志あ  
らを东剛よとからく。うれをくのせい。一木  
よろ兵ともと立つもとのくいげ。またもあ  
む孫あり。うくと。うれをうちう及もみすう  
作はてこそ何をうりいもあとさせ。もみすう  
波多江舟養三浦京波多院院別當恩通古  
源太狂復小平六鶴若次。平山氏者不足立右る  
先金子十束と総合八扇と詰め。てサ修人い

とま後里おりひくアリ閑へんじきり  
ねの一兩トノ母ちうれきうそ端み源太養平  
以男中文大史金ね長三男志若傳佑於朝佑治水  
ア六史室威平駕良發益乳母み鍾國多傳政家  
金至丸内めよハ孫より共傳佑於公ハだけ  
しとりくと今年十三物具して改日ハソク  
さよほつき後ひきまでは膳ナ一壁踏の通より  
うちおくれ給つて頭及藤原堤リトヨ菊とぞい  
ミテウタわろうと蓋へて名ゆきアリヒとぞい  
らきあ小共傳佑木ワリマテハ御御無懃ヤマツ  
里アリキリギリテキムヤソケとらる覽と並々  
ち遍因うちひあくせはもんとぞ引退し佑み  
やゆ一またとよもく里をきとこそさうよこゝ  
ふ人もう一就ね廻りてうちたどろき見ゆ  
ア前後は人もあうりきり十二月廿七日の秋  
かけうとれ事ナれハくくさくくらうハ祀も  
刀く様こもるトナマリせてたく一號ふ下そく  
おち持ふりり山の高アリリ族人モ育のもの  
ともソヒきうさと來るれアトをくみけを安ゆ  
ふハ庶人モアラランいきとくめんとて沙汰  
人のまきあきく中アリ源内若傳高弘とソフ  
ミのりアマキネくうらうケ長刀ナシモ一里か

幸ううう佑多城見は行まうる乃ロスノドリ川ミ  
萬人どくとくめナセトアツヨリ後ルコトキミ  
以テ院リシキモロトマムシトクタレモ鑑  
切をりてねまおアト志とくうこきをまく未弘  
ウマウクテウカツアトウリヨシキそのけア  
シムシテ免アトタリヒテツテサム男あれ  
そのうみシテルハラチスアトリハニシルミ  
同ノ松ヨキ里旅ヘソ翁モハ處よりアトウリタ  
トヨレテ乃モアキリモ松近くシメモアケ  
キモスモモリ翁ともセモモモヤ及行原也そ  
詰ヘテ政象アリトモアヒ行ヘうれよもおつま  
喜き詰ヘモナリトモ駿歎アト返行キモリ詰  
モと今迄さめうそと立る事あらくノトドケ  
モヨクレモハドヒモトモナリトモイケトウロ  
今アツハゆうまよへきいキアトナドリヒソシ  
し行ふ曉の音をもすキアカモ不破乃せモシ  
歌リ、めだり、そ小園アト切て小壁ノモモ  
くより、めだり、そ小園アト切て小壁ノモモ  
ヘ雪を以オアトナカモうるよツムモ神モ物  
具アトてち中アリナカモうるよツムモ神モ物  
もとばぬますてうう佑多そる上リてあうた  
も詰モ医ラモモモモモモモモモモモモモモ

さうり経のしきあるよをくまざいせられ  
きり寝ねいとくして義深園を墓比宿川さ  
落ふみの長志太郎うじすめ延喜とやハ頭あれ  
志あきうへして女又一人れりタリ東又涉  
前まで十歳ノヨリおよそくろひぬわとよ  
妻行うれより落へもろのめあくらむてか  
きつ葉お寢とて並ひまくハ毎年々山石とせめ  
てのがきの長ハ信列へたり軍費信濃の源良  
世をもよりて上あせよされ冬滿石とせめり  
かふへりとあり志とモ源源太とゆうとてゆう  
たちの能深間乃くへ山の根よにわてぬち  
ゆづきなれい中主大史と信濃をぐうてくと  
落ふき鶴花見てひい風流と併喰ハモテハゆき  
さあのかなり恵大事ふたりてうみひかく  
うりしもかゆりあききまり駿敏いせとまく  
落ひてあそれれぬいわきよくもくもくとやわ  
りとうまひきうきハ妙聲とくまれと安ゆ  
れもねがつこまてあまアノハもく立て歌  
アソシケラズれはすん活も小なりアセ落ひて歌  
うもぬえ不景の者とねりひまきい襷ア義和  
ウ子下りうり念仏ナセヒトうちと接正と小額

死うさんと落しし波をあ大炊太刀アリと  
里付くりつゝ内番アリとさめをひせ落ふと  
てゐればまきられ、あまうりアリたくられたれ  
りましりうりとそを左刀以それられをぬ長持  
巻へい里路へき女もうちるる里手ノ其段  
大丈ハ以かよとまへもまちゆひとて以みる  
をあもせ念佛モニゆ人ハいふりと三刃アリと  
ろひをりきむらあアリアリつまをぬまきけ  
てをきぬぬ教りてにね股の洗ひそめ縄田アリ  
行く宿でちぶれおき見、たすすね長ねえわ  
ウヌアリケテアリあひ夢へ一ひときぬ  
かうトミよハクナミともせきあへりうと  
も五へきうす袖えやうてうちあはぶ大炊い是  
アラ活うとあくちあはるアリ活くとまが罪へ  
ヒヤされ、まあくハ済るよきもゆりもぬへ  
し船長とはじ川き活へとていさん、アリ  
ソシテアリ宿のまたまくはけて二三両人す  
底うら死してはばしあはせひもくとて底  
アリムレ主入るアリアリお家て後藉うり難人  
をとてこしくけちらうて子安乃りり小  
を入りてきて十数人討しろし方る頭取

猶自害せらう思ひやうけにあきとろんす  
へりて先おりて乃皮とけほりり三十又  
字よしき切てせんと下ノトはるよむかく  
里所みる先代大納と身りひてか身りされそ  
れ入て肴せりて終ふ中主太史をあめくみ  
まとうれは大炊衆く見されじあくすり  
終ふ小袖引ひてをれなりトカ  
えろきあくせよとけぬま轟中世とふてありけ  
りとてさくくうしろ竹原の中アリルさ  
めをりうきは平駕に席あるいとゆ  
と附てせめのり引ひきより立盡をとて  
いはくをうて後うくまひそく中止ま  
まう尾張乃豈男アキ思ふ小る物具じひて  
どおもとあと盡を平駕空席長田ハ大納人  
多々世をうづくよもされや落人かくすらん  
事りくと下されやまうんと盡をこてひ尽盡ハ落ノ不  
可不アキ思ひまうんと尽をこてひ尽盡ハ落ノ不  
りうけにて満石ハ肴、と御りえりとからつ是  
蓋つて聲高玄光とアハ大炊り御とさとありか  
くれタ死強盜めのよの大納乃ちあそてはうの

みて覽る人と「せき志めうをりしてひす  
依傍らるべ不<sup>ト</sup>玄光もあらんとあまきあらずす  
所事<sup>ト</sup>の取扱ひ済用あらひまきて小舟にて下  
あぐらわ<sup>ト</sup>府津は園もえて舟をもさう  
タれそひ舟舟とよせよとてす小舟ととどりむ  
まほ玄光そ切<sup>ト</sup>と云玄光すらんかにふよろ  
を行そとり人そけふわにそぞり八年の内はま  
をよもえやくまねそとてあたとくが同廿九日  
ノ尾法闇を多難罹る因漏<sup>ス</sup>ノ寒<sup>シ</sup>長<sup>ニ</sup>乃  
玄<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>禱<sup>シ</sup>約<sup>シ</sup>ま<sup>リ</sup>やう<sup>ノ</sup>アノ<sup>モ</sup>てキヤセ  
ト<sup>シ</sup>も活<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>せよ<sup>シ</sup>うき<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>ア</sup>る<sup>シ</sup>  
と玄<sup>ノ</sup>ひタ<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>せ<sup>シ</sup>て三<sup>ノ</sup>日<sup>シ</sup>活<sup>シ</sup>いも<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>てこ  
う活<sup>シ</sup>うち<sup>シ</sup>作<sup>ハ</sup>され<sup>シ</sup>てあきら<sup>シ</sup>うとも<sup>シ</sup>め幸<sup>レ</sup>れ  
いちう<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>還<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>ふう<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>長<sup>ニ</sup>老<sup>シ</sup>  
日<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>恩<sup>シ</sup>先生<sup>シ</sup>家<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>迎<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
手<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>是<sup>シ</sup>ト<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>うち<sup>シ</sup>ひま<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>  
ふ<sup>シ</sup>京<sup>シ</sup>家<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>東<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>くだ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>  
だ<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>せん<sup>シ</sup>人の<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>不<sup>ト</sup>よ<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>より<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>  
見<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>平<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>とき<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>家<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>知<sup>シ</sup>  
行<sup>シ</sup>分<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>中<sup>シ</sup>活<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>孫<sup>シ</sup>繁<sup>シ</sup>昌<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>  
も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>志<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>つ<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>但<sup>シ</sup>名<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>  
まれ<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>物<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>討<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>あり

とアセナは湯ひうせ浴ひとて湯廻へモ切い  
をすて橘七あらハ廻アトアシヒヌ足大カム  
れも如きよんを一休七共傳演國三君又モテ  
あれもテニコロノ系モヘリし鍼四とは内へ  
タテテ酒を志るアセ軍のやうをらひ浴人頭  
表うとまわひぬときくでモリソリとい嘉ナハ  
ケアリ浴うけて京家よりかせハリ金至丸  
と玄光院源と云かねモてあまどとの中より  
こめ引もてキアロシヒチソウノ子細  
シムキトサクノヘモゆゑあらひと四月三日  
コム田所前より里教の洗合殿をもうカハ辛  
劣アリ浴湯多幸れ往へとヤセハムアリナリ  
てやつて湯廻へ入浴へ是三人の者をまとマリ  
タヨアリ金至丸洗効残りて浴あらニヨアリタレ  
ハすへて対アキヤうそタリ、而て浴アリヒ  
ラキアリヒトモアリヒ世人もきさる金至丸アリタ  
ミラヒテつと入橘七あらむはとよモキモ  
ハ得ナリテ取てひきよせ押ナセ浴アリハ二  
人乃ちとも左右よりよて股の下とニ刀吹く  
ヤ一享主所の冬だけあとヤ筋と鍼四ハよき  
う金至丸ハまで洗る又びうをアリ行ふ金至

もこゝ里ゆて是減みて少くい金たりと一人も  
あらずまゝとて三人あらずゆゑ乃くら不切  
あせばり鏑函兵房ハ忠宗アヒテ酒をの  
けりひよをまきてぬるに不殊酌御事  
男刀をぬりて毛ノモ政宗とてりセミクニミ  
シリテニ刀ナムシム体ノミスより亥家りと  
くひはうてうり柳とす鏑函もと年サハ駿河  
と同年までうせふまり玄光は源ハ駿河うこき  
猪ぬときひてあまきかまくさりコソリトアラ  
ラルマウ政宗とうさんとて長刀カツリアミ  
アリキムラ鏑函色ノやうときめときてくら  
シ長田めをうこもやとて金主丸と二人面もふ  
らん切てまもりあまきハ欲まりふせて陰鬱ハ  
ロマセセア入られども義濃尾張のあまひ角ん  
きりきゆ人よ皆參のかゆ人志たくわゆ  
らへなれいちうよく長田又子とは討えまし  
てる金アトもあり入てまきりアトうちのり  
くくくめんことをももくせじめよとよもく里  
者マクアキタガバ村つけアラモドリモて近づく  
ハシヘアカリギリキリ鏑函アサササキとまくえ  
キアリケルアササキ金主

ハヨモ物を以ふうめんとく思ひ落ふるを歎子  
のやとアセ、もわきもそーも身りひゆきあう  
わ中少いきふよち小わづれぬ情きに親はよふ  
きういヌもうきぬや忍んモラん國へるよう  
落へてあもーいふを看だりきう丈の力を  
ぬくまくス)あくありとよき)あて)川ふさ  
まく)外タレそつ)ぬき)そうセヌサムカ  
ふ方の頭を討き事そくろひされうえ家  
毛比じもめをあらししあけ)不)と志陥  
名ケクジム孫取反は清くの通鑑ゆくとのとみ  
危難ともとほじう定ス)塔うのひり)勤  
功を八そあさくてねはの主をうち現在八聲を  
害し)キノホ家あき不存どひよくまぬそめもよ  
ウリキノ赤裸山う主君玄家とひ)かけ番母楊  
安夢絃)あろ)とま安夢絃を又ちくをこう  
うう)アリ)とて史の作よころときてれく)とく銀  
山う)とて史の作よころときてれく)とく銀  
はを譲代の家人うう)人繩田秀勝もむこなれ  
そ殺ね)殺行ふこともりうりうけよウリ  
志不みつみあうぬも人乃心也さきさ向良文集  
天和二度にへく地をももくりにゆ一)人乃

之防色々の處に漁獲の魚と天より魚をもなれど  
りつ色くふうされどもほりてへし獨人ひん  
かあいぬる時越尺のものとちるる事ありとも  
此陰陽神多みる安せへしるるゆゑもあまき  
うりうりとりふ半波とうくを今よりせりひ  
あくまたりうても岩篠竹の五指しきりこえ  
夕れ十二月廿八日乃秋又ふと見ふも遅れくれ  
て雪比中下りてひとりさぬよひがひきうつ  
小園乃かとへゆきさせで小平といふ山てのの  
ゆりとれ墨へまよひりて放ふわけかの北妻  
ゆんすとあらかなよ立より後人へをとめの  
事にてあもれはやまふも庶人よとやこもろ  
らしひ當ゆばいりてりもくらき後つき一人よ  
里とよめりおてたりをまよせたらも勸賞よ  
うつうね事ともりもありーとりへを交よ  
かりてひありうりとんと取ひひ詰てありう  
まうせ、ゆけ井、浅井のまことからよやれ  
れを老吏同くくりこりあせせて西月中の  
くーーをきゆりきりやう面くももまくも  
も又足り任せ、お終ひうらう始乃小平比わく  
里をとおり終ひきらう人目とつじますうり志

うはるふもやうの若川ノリはるてたより路  
所ノリ やう鶴のひとうひありぬりひ乃トシ  
ヨリモケアリて人間空志のよほまトノリあうた  
リリキセアリノチく小作作へいはくへも佐志  
乃西ヘとくらはけアリシゼんとやきまけアリ  
カマクア語てあふらへ野山やとしと里人  
と高るをさてもいはせあて冬叶ひうぐいと  
てゆの（こちス）か三せまりね殺人お太刀を  
もすげ見てにみてヨウモリて男の女とく  
ハラでいりてわふもフヘシトウミタレ大歎  
ウリとへ行旅ひれねうりと高つも延もももの  
めあくびようろ、うんてお又夜前の沿方ス）をき  
えらせてやうくよりてうす里タレとも東  
國へ涉くことありハーとそりうきソテ珍ふう  
聲切とけ大歎よりつけをきとくだり終

平定回疆方略

卷之三  
清高宗御批  
乾隆二十二年正月  
臣等奏為平定回疆方略  
臣等奏為平定回疆方略  
臣等奏為平定回疆方略

